

途中、「立正安国論」を講じた場所で、近くに輪石庵という庵が存在する。また、六院十二坊を擁する本寺格寺院であり、江戸の人が身延参詣に立ち寄る寺院として存在し、このため法華信徒にまつわる資料が伝存する。輪石庵には、明治・大正期と推定される石垣があり、そこには江戸町人の名前が刻まれており、江戸に住む信徒の参詣が絶えなかったようである。

また、立正寺境内の日蓮袈裟掛松の石塔や祖師堂内の常香盤は内藤新宿と四谷の講中が寄進しているものである。年紀はないが、恐らく近世に江戸の信者が身延山巡拝の途中に立ち寄り、信仰の証しとして寄進した仏具と考えられる。

③石和遠妙寺（笛吹市石和町）は、日蓮が甲斐巡教中にこの地を訪れ、石和川の鵜飼の霊に逢い、その供養のために石に法華経を書き、川に沈めたという霊場である。また、謡曲「鵜飼」にも歌われ、日蓮像と鵜飼像の開帳儀礼が本堂で行われ、参詣者が絶えなかったという。これは「鵜飼山本妙寺霊宝不残開帳、百足之由」と道中記にあるように、巡拝者に霊宝の開帳も行われていたようである。

④小室妙法寺（増穂町小室）は、甲斐の日記類によると、修験道の寺院であったが日蓮が立ち寄り、法論を行って改宗した寺院とある。

以上、身延山参詣道中における巡拝寺院の性格についてみてきた。その結果、江戸の人々が身延参詣途中に日蓮ゆかりの寺院に巡拝し、そこで堂宇や仏具の寄進行為を行っていたことが明らかになった。江戸における法華信徒の多い居住地は、谷中・浅草・日本橋・神田といった地域で、同地域内にある寺院

には、祖師像や七面大明神像といった神仏が勧請されていた。この地域の法華信徒は参詣講を組織して身延山に登詣し、巡拝途中の寺院等に信仰の証しとしての仏像・仏具類を寄進したのである。こうして、江戸後期に身延山参拝が高まっていくと、参詣道途中の法華寺院は道中記や案内記に巡拝寺院として登場し、身延山参詣における巡拝寺院として位置づけられていったのである。

仏教教団と講集団の関わり

—— 四国遍路の事例から ——

栗田英彦

四国遍路には多くの人々や組織が関わっている。先達に率いられた四国遍路を巡拝する講集団もその一つである。本発表では、八十八ヶ所札所寺院で構成される四国八十八ヶ所霊場会（以下、霊場会と略す）の後援団体である関西先達会および愛知県先達会に所属する講集団の講元と講員への発表者自身による聞き取り調査に基づき、札所寺院と講集団の関わりについて考察した。

まず、昭和三十年代に発足した霊場会および霊場会による公認先達制度の発展に、これらの講集団は大きな役割を果たしたことに触れておきたい。現在、霊場会の財政基盤は主に先達の補任・昇補などの先達会費によっているが、公認先達制度発足当初は思うように先達補任者は増えなかったらしい。そ

第14部会

うしたなか、当時の講集団の講元（講集団の代表者）自らが先達となり、次いで講員を先達に推薦することで公認先達を補任・昇補数を増やしていった。また、関西先達会と愛知県先達会といった後援組織を発足させることで、霊場会をバックアップする体制を作ったのである。

こうした霊場会への講集団の協力には、各札所寺院と講集団の個別的な関係が基盤にある。講集団には特に関わりの深い札所寺院が一ヶ所ないし数ヶ所あり、そうした寺院を講集団は「親寺」と呼ぶことがある。「親寺」と講集団の関わりの基盤には、講元と住職の間の個人的かつ親密な関係がある場合が多い。この関係を基盤として、「親寺」からは寄付と宿坊の利用を講集団に要求し、講集団は講員の公認先達推薦を「親寺」に依頼する。

このような講元と住職の個人的関係に基づく講集団と札所寺院の関わりは、時代が下るにつれて徐々に変容している。一つには、初代の講元が亡くなることで、住職と講元の個人的関係より講集団と札所寺院の組織的關係が先に立つようになっていく、ということがある。だからといって個人的関係が消滅するわけでは決していないが、そうした出発点の違いはその関係に影響を与えていると思われる。

さらに、より重大だと思われるのが、「先達」のあり方に対する認識の変容である。これは皮肉にも公認先達制度が軌道に乗ったこと自体が要因であるだろう。ノートルダム清心女子大学の寒川友理の調査（一九九九年）によれば、先達に公認先達制度を設立した霊場会の意図を尋ねた際、「寺院の商売上手」、

「寺院の活性化」といった答えが返ってきており、その理由に先達の推薦を引き受けた札所寺院から寄付や宿坊の利用の要求がなされることを挙げている。ここからは、札所寺院住職と公認先達らの「先達」という存在の認識の違いが垣間見える。つまり、寺院側は「先達」とは講集団のリーダーであり、先達の推薦をするということは先述したような講集団と札所寺院の関係を結ぶ（つまり、講集団の「親寺」になる）ことであるという考え方が根底にあると思われる。一方、先達側は、先達とは霊場会組織による公認の資格であり、札所寺院は霊場会全体の窓口にすぎないものだという認識をもっている可能性がある。近年の先達がこれまでの講のような大規模な集団を構成しようとするのではなく、仲間同士の小規模な巡拝を志向しているものが多いこともこの認識のずれに拍車をかけているだろう。公認先達の称号に一種のブランドとしての機能が強くなっていることも関係しているかもしれない。

こうした講集団は、講員の高齢化やここ数年で増加した旅行会社による格安の日帰りバスツアーに押されて、衰退が著しい。講集団の世代交代、「先達」の認識の変容、そして講集団の衰退といった流れは、講集団と札所寺院の関係を今後ますます変容させていくと思われる。